

齋藤竹堂撰 『鍼盲録』 訳註稿 (六)

堀 口 育 男

要 旨

『鍼盲録』は、江戸時代末期の儒学者齋藤竹堂が、天保十年八月から九月にかけて、江戸から常総房を旅した時の漢文遊記である。

本連載「齋藤竹堂撰『鍼盲録』訳註稿」では、『鍼盲録』本文の翻刻、訓読、語釈、訳語を行なつてみるが、今回は、八月廿八日に小田城跡（つくば市小田）を訪れて詠じた古詩「觀小田城墟引」（小田城の墟を觀る引）を対象として訳註を行なつた。なほ、旅行中の詩は『鍼盲録』には載せられてゐないので、『竹堂詩鈔』に拠つてゐる。

七. 八月廿八日（承前）

附詩

觀小田城墟引

古壘茫茫寒煙碧。豪華零落非疇昔。我來弔古久躊躇。敗瓦頽砌
①迷疆場。想見中興天下重淪胥。獼猴一嚼吞鳥魚。此公獨抱勤王

『人文コミュニケーション学科論集』七号、四九・五九頁

②志。將從此土漸剷除。兵馬倥傯聞援筆。滿腔熱血灑成帙。一則辨皇統。一則正職秩。乃欲因之持名分。長使亂臣賊子心膽慄。③却被反豎倒其戈。不成一事竟蹉跎。南風不競嗟已矣。天下無地屬王家。公已沒後三百年。反豎有後反連綿。蠶食四鄰日強大。經十五世猶能傳。興亡有機誰敢測。一旦軍敗支無力。旌旗慘澹鼓聲哀。殘軀局促草間匿。城荒隍廢復何有。不免終爲狐兔藪。維④公雖已逝。猶有書不朽。不似反側子。枉遺千古醜。乃知百年之榮不足恃。惟不朽者文字耳。滿懷大息訴無人。但憶巨筆縱橫揮落紙。吁嗟草苔如染滿地青。無乃當時筆痕之所致。

- ①良齋曰、俯仰激宕、覺悲風從紙上起、颯颯有聲、
- ②枕山曰、後世水府之史、雖浩瀚而基本於此一帙乎、
- ③又曰、天道是耶非、然有文字而知是與非也、
- ④湖山曰、乃知二句大爲文士吐氣、非特爲北畠公發慨也、

〔訓読〕

小田城の墟を觀る引
古壘茫茫として寒煙碧なり

豪華零落して疇昔に非ず
我來りて古へを弔ひ 久しく躊躇す
敗瓦、頽砌、疆場に迷ふ
想ひ見る 中興の天下 重ねて淪胥し
彌猴 一嚼して 鳥魚を呑みしを
此の公 独り勤王の志を抱き
將に此の土より漸く剷除せんとす
兵馬倥傯 問ま筆を援り
滿腔の熱血 灑ぎて帙を成す
一は則ち皇統を辨じ
一は則ち職秩を正す
乃ち之れに因りて名分を持し
長く乱臣賊子の心膽をして慄れしめんと欲す
却て反豎に其の戈を倒にせられ
一事すら成さず 竟に蹉跎たり
南風競はず 嗟 已んぬるかな
天下 地の王家に属する無し
公 已に没して後 二百年
反豎に後有り 反て連綿たり
四隣を蚕食して 日に強大なり
十五世を経て猶ほ能く伝ふ
興亡 機有り 誰か敢て測らん
一旦 軍敗れて 支ふるに力無く

旌旗慘澹として 鼓声哀し
残軀局促して 草間に匿る
城荒れ 隍靡れて 復た何か有らん
終に狐兔の藪と為るを免れず
維れ 公已に逝くと雖も
猶ほ書の朽ちざる有り
似ず 反側子の
枉げて千古の醜を遺すに
乃ち知る 百年の榮は恃むに足らず
惟だ朽ちざる者は文字のみなるを
滿懷の大意 訴ふるに人無し
但だ憶ふ 巨筆 縦横 揮ひて紙に落しゝを
吁嗟 草苔染めしが如く 滿地青し
乃ち當時の筆痕の致す所なる無からんや
(眉批)
①良齋曰はく、俯仰激宕、悲風、紙上より起こり、颯々として声有るを覚ゆ。
②枕山曰はく、後世水府の史、浩瀚なりと雖も、此の一帙に基本するか。
③又た曰はく、天道是か非か。然れども文字有りて是と非とを知るなり。
④湖山曰はく、乃ち知るの二句、大いに文士の為に氣を吐く。特に北畠公の為に慨きを發せしのみ非ざるなり。

〔語釈〕

○觀小田城墟 本文に「觀小田氏城趾。」とあつた。墟は、前出（八月廿七日の条）。

○引 樂府の一体で、事の本末を順序よく述べたもの。『文休明辯』樂府に「述事本末、先後有序、以抽其臆、曰引。」とある。一般には、単に、うた、の意で用ゐられる。唐、杜甫「韋諷録事宅觀曹將軍畫馬圖引」、丹青引贈曹將軍霸」、同、劉禹錫「秋風引」など。

○古壘 古いとりで。昔の城壘。古戍。壘は、土を重ねて築いた城壁。南宋、陸游「漢宮春詞」に「羽箭雕弓憶呼鷹、古壘截虛平川。」とある。故壘ならば、唐、劉禹錫「西塞山詩」に「今逢四海為家日、故壘蕭蕭蘆荻秋。」とある。

○茫茫 広々としたさま。はつきりしないさま。とりとめなく広がつてゐるさま。唐、劉長卿「平蕃曲」に「渺渺戍烟孤、茫茫塞草枯。」とある。

○寒煙 寒々しいもや。寂しげなもや。煙は、もや、または、けむり。唐、駱賓王「丹陽刺史挽詞三首」其二に「唯餘松柏壘、朝夕起寒煙。」とあり、同、陶翰「經殺子谷詩」に「疏蕪盡荒草、寂歷空寒煙。」とあり、同、張繼「河間獻王墓詩」に「偶過河間尋往跡、卻憐荒冢帶寒煙。」とあり、同、吳融「秋色詩」に「曾從建業城邊過、蔓草寒煙鎖六朝。」とある。

○碧 あをい。みどり。濃い青色。青綠色。唐、李白「南軒松詩」に「陰生古苔綠、色染秋煙碧。」とあり、同、杜甫「十二月一

日三首詩」其二に「寒輕市上山煙碧、日滿樓前江霧黃。」とあり、同、徐鉉「送馮侍郎詩」に「斬蛟橋下谿煙碧、射虎亭邊草路清。」とある。城跡に生えてゐる草や苔のために、もやが青みを帯びて見えるのである。遙かに、末尾近くの「草苔如染滿地青。」と呼応する。

○豪華 富貴の家。財産や勢力のある家。また、華やかで立派なこ。唐、盧照鄰「長安古意詩」に「別有豪華稱將相、輒日回天不相讓。」とあり、同、許渾「金陵詩」に「英雄一去豪華盡、唯有青山似洛中。」とある。

○零落 草木の葉が枯れ落ちること。また、おちぶれること。さびしくなること。こゝでは後者。唐、白居易「琵琶行」に「門前零落鞍馬稀、老大嫁作商人婦。」とある。

○疇昔 前日。また、往昔。昔。こゝでは後者。唐、裴迪「孟城坳詩」に「古城非疇昔、今人自来往。」とある。

○我來 唐、李白「經下邳圯橋懷張子房詩」に「我來圯橋上、懷古欽英風。」とある。

○弔古 古へを弔ふ。旧事に感じていたみ悲しむこと。南宋、朱熹「短句奉迎荆南幕府詩」に「弔古寧忘恨、開尊且破愁。」とある。

○躊躇 たちもとほる。行きつ戻りつする。去りがてにする。『楚辭』、宋玉「九辯」に「蹇淹留而躊躇。」とあり、晉、向秀「思旧賦」に「心徘徊以躊躇。」とあり、唐、杜甫「登兗州城樓詩」に「從來多古意、臨眺獨躊躇。」とある。

○敗瓦 破損したかはら。瓦は、土を焼いて造つた板状のもの。屋根に葺いたり、土間に敷いたりする。

○頽砌 崩れたみぎり。砌は、階段下の石だゝみ。また、石の階段。

○迷 まよふ。唐、陳子昂「晚次樂鄉縣詩」に「川原迷旧国」、道路入「辺城」とあり、同、戴叔倫「江上別張勸詩」に「山川迷道路」、伊洛暗「風塵」とある。

○疆場 あぜ。田地のさかひ。疆は大界、場は小界。また、国のさかひ。国境。こゝでは前者。『毛詩』小雅「信南山」に「疆場翼翼、黍稷彧彧」とあり、『集伝』に「場、畔也」とある。場は、底本「場」に作るのを改めた。

○想見 想像して思ひ描く。唐、儲光羲「遊茅山五首」其四に「想見中林士、巖扉長不關」とあり、同、劉長卿「酬李侍御登岳陽見寄詩」に「想見孤舟去、無由此路尋」とあり、同、杜甫「熱三首」其二に「想見陰宮雪、風門颯踏開」とある。なほ、頼山陽「謁楠河州墳有作詩」に「想見訣兒呼弟來戰此、刀折矢盡臣事畢」とあり、同「壇浦行」に「想見九郎驅敵來、平氏如魚源氏纒」とある。

○中興 一旦衰へたものを再び盛んにすること。『毛詩』大雅「烝民序」に「任賢使能、周室中興焉」とある。こゝは、所謂、建武の中興を指す。

○重 重ねて。またもう一度。

○淪胥 『毛詩』小雅「雨無正」に「若此無罪、淪胥以鋪」と

あり、『集伝』に「淪、陷、胥、相、鋪、徧也」とある。また、『同』大雅「抑」に「如彼泉流、無淪胥以亡」とあり、『集伝』に「淪、陷、胥、相」とある。『漢語大詞典』では「相率牽連」として『毛詩』小雅「雨無正」の用例を挙げた上、「后泛指淪陷、淪喪」として、『晋書』涼武昭王李玄盛伝に「淳風抄莽以永喪、摺紳淪胥而覆溺」とあり、清、顧炎武「酬李子德二十四韻」に「一身長瓠落、四海竟淪胥」とあるのなどを用例として挙げ、こゝも、淪陷、淪喪に同じく、衰へる、滅びる、落ちぶれる、といった意に解せられる。

○獼猴 猴の一種。おほざる。沐猴。こゝでは『太平記』に見える天王寺の「未来記」の記述を踏まへて、足利氏を指す。『太平記』卷六「正成天王寺未来記披見事」に抛れば、元弘二年八月四日、楠木正成が天王寺に詣で、上宮太子が書き置かれたといふ「日本一州ノ未来記」を披見したところ、「當人王九十五代。天下一乱而主不安。此時東魚來吞四海。日没西天三百七十餘箇日。西魚來食東魚。其後海内帰一三年。如獼猴者掠天下三十餘年。大凶變帰一元。云々」とあつたといふ。なほ、獼は、底本「獼」に作るのを改めた。獼は狩の意。

○一嚼 一たびかむ。嚼は、かむ。噛み砕く。

○呑 のむ。のみこむ。

○鳥魚 『太平記』では、正成は、前引の「未来記」の記述に就て「東魚來テ呑四海トハ逆臣相摸入道ノ一類ナルベシ。西鳥食東魚トアルハ關東ヲ滅ス人可有」と判じてをり、こゝも、鳥は新

田氏（南朝勢力）、魚は北条氏（鎌倉幕府）を指すものと解せられる。それがともぐ、獼猴、即ち、足利氏に「かみにかみ砕かれ、呑み込まれてしまった、といふのである。なほ、頼山陽『日本樂府』に「東魚西鳥」がある。

○此公 北畠親房を指す。

○勤王 王事に勤める。王室の事に力を尽す。『左氏伝』僖公二十五年に「求諸侯莫如勤王」とあり、西晋、潘岳「西征賦」に「痛百寮之勤王、咸畢力以致死」とある。

○此土 小田城の周辺地域。やゝ広くは常陸国。

○漸 次第に。段々と。

○剗除 刈つて取り除く。剗は、削る。また、刈る。減ぼす。『宋書』蕭惠開伝に「寺内所住齋前、有嚮種花草甚美、惠開悉剗除。」とある。こゝは草を刈り取るやうに、敵対勢力を打ち倒して、平定することを言ふ。

○兵馬 武器と軍馬。転じて、戦争。軍事。唐、杜甫「出郭詩」に

「故国猶兵馬、他郷亦鼓鼙。」とある。

○倥傯 忙しいさま。慌しいさま。南齊、孔稚圭「北山移文」に「牒訴倥傯、其懷。」とある。

○間 まゝ。その間に。

○援筆 筆を持つ。『魏志』陳思王植伝に「援筆立成。」とある。

○滿腔 胸一杯。体中。

○熱血 あつい血しほ。熱烈な精神の喩。清、吳偉業「賀新郎病中有感詞」に「耿耿胸中熱血、待灑向西風殘月。」とある。

○灑 そゞぐ。（水などを）そゞぎかける。

○成帙 書物とする。また、書物として出来上る。帙は、ふまき。ふみづゝみ。書物を包むおほひ。転じて、書物。

○辨 わきまへる。明らかにする。

○皇統 皇位の正統。「辨皇統」とは、『神皇正統記』の撰述を指す。『神皇正統記』は、延元四年、親房小田在城中の著。興国四年、大宝城中にて修訂を加へた。慶安二年の板本がある。『群書類従』帝王部所収。

○職秩 職位と官俸。『左氏伝』昭公二十二年に「王子朝因旧官百工之喪、職秩者与景靈之族以作乱」とある。「正職秩」とは、『職原抄』（『職原鈔』）の撰述を指す。『職原抄』は、わが国の官職の沿革、職掌、慣例などに就て、漢文体で述べた書で、興国元年二月、親房小田在城中の著。室町期にはすでに写本で流布してゐたが、近世に入ると、慶長勅版を始めとして、夥しい板本が刊行せられた。『群書類従』官職部所収。

○乃 すなはち。そこで。かくて。上を承けて下を起す。『詩家推敲』には「乃ハ辭之緩也ト訓ズ。」として用例を挙げ「語勢緩シテ含蓄ノ意ミルベシ。」とあり、また「語勢ニ轉ズル意アリ。」とも言ふ。

○名分 名前とそれに伴ふ人倫上の分限。『莊子』天下に「易以道陰陽、春秋以道名分。」とある。こゝでは、皇位の正統は南朝に在ること、及びわが国に生を享けた者は、すべて臣として、正統の君に忠を盡すべきである、との大義名分。

○長 長く。とこしへに。永遠に。

○亂臣賊子 国を乱す臣下と親に背く子。主君に叛逆したり、親を害したりするやうな不忠、不孝の輩。『孟子』滕文公下に「孔子成春秋、而亂臣賊子懼。」とあり、唐、韓愈「伯夷頌」に「微子子、亂臣賊子接跡於後世矣。」とある。

○心膽 心ときも。心。

○慄 おそれをのゝく。恐ろしきでふるへる。すくむ。ぞつとする。

○却 かへつて。逆に。

○反豎 裏切者を罵つて言ふ語。反は、反逆。寝返り。豎は、子供。転じて、人をいやしめて言ふ語。小僧。

○倒其戈 戈をさかしまにする。今まで敵に向けてゐた戈を逆にして、味方を攻める。変節する。寝返る。『尚書』武成に「前徒倒戈、攻于後以北。」とある。こゝは、曆応四年、小田治久が北朝側に降り、却て南朝側を攻めたことを指す。本文「後叛從北朝」の語釈参照。

○不成一事 一つとして成果を得られない。唐、白居易「題四皓廟詩」に「若有精靈應笑我、不成一事謫江州。」とある。

○竟 つひに。結局。

○蹉陀 つまづく。失敗する。思ふやうにならない。志を得ない。唐、張九齡「照鏡見白髮詩」に「宿昔青雲志、蹉陀白髮年。」とあり、同、白居易「答故人詩」に「見我昔榮遇、念我今蹉陀。」とある。こゝは、親房の東国経略に由る南朝勢力挽回策が、

結局、失敗に帰したことを言ふ。

○南風不競 南方の音楽の調子が、北方の音楽の調子に比べて弱々しく、生気がない、といふことから、南方の国である楚の勢力が振はないことの喩。『左氏伝』襄公十八年に「晋人聞有楚師。師曠曰、不害。吾驟歌北風又歌南風。南風不競多死声。楚必無功。」とあるのに由る。わが国では、南朝の衰勢を言ふ。頼山陽『日本外史』新田氏前記、楠氏論に「南風不競、俱傷共亡。」とある。

○嗟 あゝ。嗟歎の辞。嘆く声。親房の嘆きであると同時に作者の嘆きでもある。

○已矣 やんぬるかな。終つてしまった。今となつては如何ともし難い。絶望の辞。『楚辞』「離騷」に「已矣哉、国無人莫我知兮、又何懷乎故都。」とあり、前漢、賈誼「弔屈原文」に「已矣国其莫我知兮、獨壹鬱其誰語。」とあり、唐、陳子昂「薊丘覽古詩」に「霸圖悵已矣、驅馬復歸來。」とある。已は、底本「已」に作るのを改めた。

○王家 天子の家。『尚書』武成に「王季其勤王家。」とあり、『同』金縢に「昔公勤勞王家。」とあり、『同』康王之語に「保又王家。」とある。

○公已没後二百年 親房の薨去した正平九年から、小田氏第十五代氏治が手這坂合戦に敗れて、最終的に小田城を失つた永祿十二年まで、足かけ二百十六年になる。已は、底本「已」に作るのを改めた。

○有後 子孫が続いて栄える。後は、後嗣。『左氏伝』桓公二年に「臧孫達其有後於魯乎。」とある。

○反 反対に。逆に。

○連綿 絶えることなく長く続くさま。

○蠶食 蠶が桑の葉を食ふやうに、次々と他国、他領を侵略し、併呑すること。『戦国策』秦に「(昭王)蠶食諸侯、使秦成帝業。」とあり、『韓非子』存韓に「諸侯可蠶食而盡。」とある。

○四鄰 四方の隣国。四方の隣り合った他領。『尚書』蔡仲之命に「懋乃攸績、陸乃四鄰、以蕃王室以和兄弟。」とある。

○日 日にく。

○強大 強く大きくなる。『老子』七十六に「強大処下、柔弱処上。」とあり、『戦国策』秦に「是使国無富利之实、而秦無強大之名也。」とあり、唐、白居易「新樂府」の中「蛮子朝」に「六詔星居初瑣碎、合為一詔漸強大。」とある。

○興亡有機 機の基本の義は、からくり、であるが、こゝは、時機、しほどき、の意か。興亡有機とは、ある勢力が興隆したり、滅亡へ向つたりするには、さうなるしほどき、潮目といふものがある、ということであらう。頼山陽「過一谷懷平原興亡事作歌」に「勝敗有機少人知、繪畫徒傳娛童兒。」とあるのが、文字面の上では似てゐる。

○一旦 ひとたび。

○旌旗 はたの総称。旗指物。唐、杜審言「送崔融詩」に「旌旗朝朔氣、笳吹夜辺声。」とあり、北宋、蘇軾「前赤壁賦」に「舳艫

千里、旌旗蔽空。」とある。

○慘澹 薄暗く、もの凄まじいさま。また、嘆かしく、いたまじいさま。慘淡。唐、杜甫「龍門鎮詩」に「旌竿暮慘澹、風水白刃洪。」とあり、同、同「陳拾遺故宅詩」に「悠揚荒山日、慘澹故園煙。」とある。こゝは、旗色の悪いことを言ふ。

○鼓聲 つゞみの音。鼓は、こゝでは陣太鼓。『六韜』龍韜、勵軍に「聞金声而怒、聞鼓声而喜。」とあり、『漢書』李陵伝に「聞鼓声而縦、聞金声而止。」とあり、唐、楊炯「從軍行」に「雪暗凋旗畫、風多雜鼓声。」とある。

○哀 普通であれば、勇ましく響く筈の陣太鼓の音が、頽勢下に在つては、逆にも悲しく聞こえる、といふのである。

○殘驅 そこなはれたからだ。戦に敗れて手を負つたことなどを言ふ。敗残の身。

○局促 身をかぎめて小さくなるさま。こせくするさま。体を小さくしておそれるさま。後漢、傅毅「舞賦」に「嘉關雎之不淫兮、哀蟋蟀之局促。」とあり、『後漢書』鄭衆伝に「令西域欲歸化者、局促狐疑。」とある。

○草間 くさむらの中。草野の中。転じて、草深い田舎。また、民間。『晋書』周顛伝に「吾備位大臣、朝廷喪敗、寧可復草間求活、外投胡越邪。」とある。

○匿 隠れる。潜む。逃げる。

○隍 城のからぼり。水のあるのを池と言ひ、水の無いのを隍と言ふ。なほ、こゝは「城隍荒廢。」の互文と見てよい。荒廢は、荒れ

すたれる。『論衡』調時に「倉卒之世、人民亡、室宅荒廢。」とあり、『隋書』李崇伝に「城本荒廢、不可守禦。」とある。

○復何有 この上、更に何が残つてゐようか。何も残つてゐない、の意。唐、皇甫冉「山中五詠」の中「山館詩」に「空庭復何有、落日照青苔。」とあり、同、白居易「青冢詩」に「凝脂化為泥、鉛黛復何有。」とある。

○不免 まぬかれない。避けることが出来ない。逃れられない。

○狐兔藪 狐や兔の棲むやぶ。狐兔は、晋、張載「七哀詩」に「狐兔窟其中、蕪穢不復掃。」とあり、唐、李白「憶崔郎中宗之遊南陽遺吾孔子琴撫之澗然感旧詩」に「泉戸何時明、長掃狐兔窟」とあり、同、杜甫「憶昔二首」其二に「洛陽宮殿燒焚盡、宗廟新除狐兔穴。」とある。

○維 これ。発語の辞。惟に同じ。

○已 底本「巳」を改めた。

○逝 世を去る。

○不似 似てゐない。違つてゐる、といふこと。

○反側子 心配なことがあつて心が落着かない者。二心を抱く者。謀叛人。『後漢書』光武紀に「令反側子自安。」とある。

○枉 まげて。無理に。ことさらに。『詩家推敲』には「徒二勞スル意ナリ、」とある。

○千古醜 千年にもわたる汚名。永遠の恥。醜は、みにくい行為。また、恥。

○乃 すなはち。そこで。

○百年之榮 百年の長きにわたる繁栄。榮は、繁栄、栄華。

○恃 たのむ。頼りとする。

○惟 たゞ。唯に同じ。

○文字 こゝでは、文字を以て書き記されたもの、の意。

○滿懷 ふところろに満ちる。胸一杯。『漢書』陳遵伝に「酒醪不入口、臧水滿懷。」とあり、五代、南唐、李煜「扇詩」に「揖讓月在手、動播風滿懷。」とある。

○大息 大いきをついて嘆く。また、大きなため息。太息。『荀子』法行に「事已敗矣、乃重大息、其云益乎。」とあり、唐、盧仝「孟夫子生亭賦」に「大息吾躬于夫子之亭。」とある。

○巨筆 大きな筆。また、立派な文章。大文章。北宋、蘇軾「次韻張安道説杜詩詩」に「巨筆屠龍手、微官似馬曹。」とある。

○落紙 (筆を) 紙の上に下ろす。唐、杜甫「飲中八仙歌」に「張旭三杯草聖傳、脫帽露頂王公前、揮毫落紙如雲煙。」とあり、同、耿漳「詠宣州筆詩」に「落紙驚風起、播空見露濃。」とある。

○吁嗟 あゝ。嘆く声。また、嘆く。嘆くさま。西晋、潘岳「西征賦」に「驅吁嗟而妖臨、搜佞哀以拝郎。」とあり、『孔子家語』執轡に「民惡其殘虐、莫不吁嗟。」とある。

○草苔 くさどけ。阪井虎山「泉岳寺詩」に「墳前滿地草苔濕、盡是行人流涕痕。」(『大漢和』)とある。

○無乃 『詩家推敲』に「豈不是ト云カ如シ、亦含蓄ノ意アリ、」とある。

○良齋 安積信。字は思順、子明。良齋はその号。陸奥国安積郡の人。寛政二年生。佐藤一齋、林述齋に学ぶ。二本松藩儒、同藩校敬学館教授。嘉永三年、幕府儒官となる。万延元年歿。七十一歳。著『良齋文略』『良齋問話』他。

○俯仰 うつむいたり、ふり仰いだりする。こゝは、歴史に感じ、感慨を発する時の動作。

○激宕 激しい。

○悲風 悲しげに吹く風。唐、高適「宋中詩」に「寂寞向秋草、悲風千里来。」とある。こゝは、南朝の悲運の気を帯びて吹く風。

○紙上 紙の上。紙面。

○颯颯 風の音の形容。『楚辞』九歌「山鬼」に「風颯颯兮木蕭蕭。」とある。

○枕山 大沼厚（益友）。字は子寿、直公。枕山はその号。江戸の人。文政元年生。梁川星巖の玉池吟社に加はる。後、下谷吟社を開き、幕末から明治にかけて、江戸、東京詩壇の中心的存在として活躍する。明治二十四年歿。七十四歳。著『枕山詩鈔』『江戸名勝詩』他。

○水府之史 水戸藩が編修した『大日本史』を指す。水府は水戸。こゝでは水戸藩。『大日本史』は、第二代藩主徳川光圀がまだ世子であった明暦三年、編纂に着手。享保五年、本紀と列伝二百五十巻が完成し、幕府に献上せられた。（享保本）その後、論贊が削除せられるなどのことがあつたが、文化三年から出版に着手、嘉永二年、紀伝部二百四十三巻全部の刊行を終る。なほ、志表部と目録五

巻を含めた全四百二巻が完成したのは、明治三十九年二月。『國史大辭典』「大日本史」の項（鈴木暎一執筆）等参照。

○浩瀚 広大なさま。こゝでは、書物の大部なことを言ふ。

○基本 根本として基づく。

○此一帙 『神皇正統記』を指す。

○天道是耶非 天の道は果して正しいものか、否か。天は公平無私であり、常に善（正義）に味方する、との一般的通念に疑問を發した語。『史記』伯夷伝に「儻所謂天道是邪非邪。」とあるのに由る。

○湖山 小野卷（長愿）。字は懷之、侗翁、舒公、子達。湖山はその号。近江国の人。文化十一年生。詩を梁川星巖に学び、玉池吟社に加はる。竹堂と親交があつた。明治四十三年歿。九十七歳。著『湖山樓十種』他。

○乃知二句 「乃知百年之榮不足恃、惟不朽者文字耳。」の二句を指す。

○文士 文筆に従事する人。学者、文章家、詩人の類。

○吐氣 抑へられた志を存分に伸ばす。唐、李白「梁甫吟」に「寧羞白髮照清水、逢時吐氣思經綸。」とある。但し、こゝは、盛んな意気を示す、気焰を上げる、の意。

○特 たゞ。たゞに。限定の辞。

○慨 嘆き。いきどほり。慨嘆。忼慨。

〔試訳〕

小田城の跡を觀る歌

古い城跡は、はつきりした区劃もなく一面に広がつてをり、寒々しいもやが（草や苔の所為で）青緑色を帯びて立籠めてゐる。かつて豪華榮華を誇つたこの城も、今ではすっかりさびれ果て、全く昔の面影は無い。

私は此の地を訪れ、古へのことを傷み悲しんで、長い時間、立ち去りがてにしてゐる。

缺け損じた瓦や崩れた石だゝみの石が散らばり、田畑のあぜからは、かつての城の区劃も定かには分らない。

私は往時のことを臉に浮べて想像する。鎌倉幕府を倒して成つた建武の中興は、忽ち旧の如くに崩壊してしまつた。

獼猴が一噛みして鳥も魚も、もろとも呑み込んでしまつたのである。（足利氏が鎌倉幕府の旧勢力も新田氏等の南朝勢力も共に討ち滅ぼして、天下を手中にする勢ひになつた。）

さうした中、この親房公はたゞ一人、勤王の志を抱き、

この小田（常陸）の地から次第に周辺の地域を平定して行かうといふ計略を立てた。

軍陣の慌しい中で筆を執つては、体中の熱い血しほを灑ぎかけて、書物を書き上げた。

その一つ、『神皇正統記』では、皇位の正統を辨へ明らかにし、

も一つ、『職原抄』では、官職官位の正しい姿を示した。

そして、これに因つて大義名分をしつかりと保ち、

長く後世に至るまで、道義に背く叛逆者どもの心を震へをの、かせようとしたのである。

しかし、逆に頼りとした小田氏に裏切られて、その攻撃を受け、結局、何一つとして成果を上げることが出来ず、志を得ない結果となつた。

南朝の勢力は振はず、嘆いても如何ともするすべが無かつた。

天が下に、南朝の朝廷の支配地が無くなつてしまつたのである。

親房公が世を去つてから二百年の間、

裏切り者の小田氏は、逆に子孫が絶えることなく長く栄えた。

周囲の土地を侵略して、日に／＼強大になり、

十五代もの長きにわたつて、大名として続いたのである。

しかし、世の中の興亡、盛衰には「機」（しほどぎ）といふものがあつて、それは誰にも測り知ることの出来ないものである。

一旦、戦さに敗れ、頽勢に陥ると、もはや支へる力もなく、衰退して行つた。

旗色は惨めに暗く、勇ましい筈の陣太鼓までも哀調を帯びて響いた。

戦ひに敗れて手負ひとなつた身を、小さく縮めて、こそ／＼と草むらの中に身を隠して生き延びた。

城は荒れ、からぼりは役に立たなくなり、その上、何が残つてあ

よう。

かつての城の跡は、結局、狐や兔の棲む藪になるしかなかつた。

親房公自身は、すでに世を去つたとは言へ、

永遠の命を持つ、その著書は、今も世に残つてゐる。

謀叛人が、

ことさらに永遠の汚名を世に残してゐるのは大違ひである。

このことから分るのは、この世で縦ひ百年の榮華を得たとしても、それは頼みとするに足りない、はかないものであり、

たゞ永遠に滅びないものとは、文字で書いたもの（書物、文章など）が有るのみなのだ、といふことである。

胸一杯の感慨を吐き出して、大きなため息をついても、私のこの思ひを伝へることの出来る人は誰もゐない。

たゞ、かつて親房公が大きな筆を思ふ存分揮つて、立派な文章を綴つたときの有様を想像するのみである。

あゝ、今、この城跡には草や苔が生えて、地面一面が染めたやうに青いが、

これは、当時の筆の跡が残つた所為ではなからうか。

〔眉批〕

①良斎が言ふ。「うつむいたり、ふり仰いだりして歴史に思ひを馳せ、激しい感慨が溢れてゐる。悲しみを帯びた風が、紙の面から音をたて、吹いて来るかのやうな気がする。」

②枕山が言ふ。「後世、水戸藩が編修した『大日本史』は、分量こそ膨大であるが、その根幹を為す理念は、親房公の著したこの『神皇正統紀』一帙に基づくものであらうか。

③枕山がまた言ふ。「天の行なふ道は、果して正しいのか、否か。（それは俄かには判断し難いが、）しかし、文字といふものが有つて、初めて正しいものときうでないものとの区別が分るのである。」

④湖山が言ふ。「乃知」の二句は、大いに我々文事に関はる者の為
に意気を示したものである。たゞ北畠公の為に慨嘆したゞけのも
のではない。」

〔附記〕

本作品は、次のやうに押韻してゐる。

碧、昔、場（入声陌韻）、胥、魚、除（上平声魚韻）、筆、帙、
秩、慄（入声質韻）、戈、跼、家（下平声歌韻麻韻通韻）、年、綿、
傳（下平声先韻）、測、力、匿（入声職韻）、有、藪、朽、醜（上声
有韻）、恃、耳、紙（上声紙韻）、致（去声寘韻）。

本文には換韻箇處を「」で示した。但し、末句の致が單獨で押韻してゐるのは不審。恐らく、作者はその前の、恃、耳、紙と一類の韻となるものとして用ゐてゐるものかと思ふが、上声紙韻と去声寘韻とは通韻は認められないと思はれる。或いは作者の思ひ違ひで混用したものか。